

海外出張の思い出 (旧ソ連・ノボロシースク編 ⑦)

高島 敬明

人員が一挙に増え、気候もよくなってくると工事現場の方も騒がしくなってきました。どの会社も少しでも早く仕事を進めたいわけですが、我々の機器のセッティングが終了しないと他業者の仕事は始めることが出来ません。海運省とフランスのUIE社も入っての全体工程調整および日本側内部における業者間の調整が次第に円滑に行かなくなってきました。岸壁の広がったスペースもいろいろな機器、配管、資材などがどんどん持ち込まれ狭くなってきます。大きな機械を設置するわけですが、積木細工のように組み立てる順番があり、間違えると必要な機器が入らなくなってしまいます。折角完成しても再度解体してやり直さなければならなくなります。どの業者も次第に殺気だってきました。いずれにしても当社が中に入り順番を決めなければなりません。そんな中で大きな事故が起きてしまいました。

このところカラッとした好天が続いていました。その日もいい天気でしたがなぜか朝から台風並みの30～40メートルの風が吹き荒れています。エレベーターの周りを鉄骨で組み上げたギャングウェイに取り付けてある日本から持参した“こいのぼり”のシippoが千切れて飛ばされるのが見えます。現地の人のお話では、この風は1日で止まなければ3日、3日で止まなければ1週間、1週間で止まなければ1か月続くと言われていました。黒海はネットで見ると温暖湿潤気候とありますが、その通り黒海は沖合まで荒れていないのです。ノボロシースク湾だけの現象なののでしょうか？カフカス山脈の地形の関係でしょうか？ともかく現場ではクレーンを使う作業はすべてできなくなりました。工程が遅れてくる中、横浜から来た鉄骨業者が困り切っていました。塗装工事を急がないと建て方が出来ないからです。遅れると中の計装電気工事に響くので工程会議では何度も念を押されていました。その業者は悩んだあげく、鉄骨の柱(H鋼)を塗装監督自らクレーンを使いペンキ作業ができるように裏返しにする作業を始めたよ

うです。そして事故は起こったのです。

緊急の連絡がありとにかく現場に急ぎました。説明によると強風であおられ鉄骨が回転し、別の鉄骨との間に監督自ら足を挟まれ、両足とも向う脛の部分を骨折したのです。すぐ寺島さん同道で病院に運び込みましたが、治療は無理なようでただ見守しかありません。本人は、「申し訳ない、申し訳ない」と謝るばかりでした。Yプロマネの判断で、こちらの治療では後遺症の可能性があり担架に寝かせたまま会社の人の帰国に合わせ、社員が付き添って帰すことに決めました。40歳くらいの人でしたが、「こんなことで来たのではない。帰りたくない!」と声を出して泣いていました。皆、我がことのように黙っているばかりでした。

労働者の国ですが、労働基準監督署のようなものは無く、たいした問題にはなりません。日本では一週間は立入禁止になり、責任追及されるでしょう。

ところで、黒海はこの地に来るまでは地図で見たことがあるな、という程度の認識しかありませんでした。すこし解説させていただきますと、——黒海はご存知のようにヨーロッパとアジアの間にある内海で、面積は約436万平方キロメートルもあり日本やドイツもすっぽり入るほど大きいのです。周囲をトルコから時計回りにブルガリア、ルーマニア、ウクライナ、ロシア、ジョージアの6か国に囲まれています。平均水深は1,253mと深く、最深部は2,206m



メーデーの日、海軍省の役人と。中央は監督官、右は著者。



後方の円筒形が流量測定機器。手前の資材が継ぎ手など。

もあります。黒海という名は、黒みを帯びた海水に由来しています。注ぎ込む河川で最大のものは「美しき青きドナウ」で有名なドナウ川です。流れ込む河川の水運、そしてエーゲ海から地中海に繋がっていることから重要な水運の交通路になっています。

大きな事故の発生のかたわら、小さな事故もよく起こります。ある時女性の通訳が現場を見たいと言ってきました。ヘルメットも被らず運動靴のようなものを履いてついてきました。そんな中後ろの方で素っ頓狂な、ギャーギャーという叫び声が出ます。どうしたものかと駆けつけますと、何か水たまりからビリビリ来たと言います。これはすぐ電気だと思いました。前々から気になっていたのですが、溶接用の、故障ばかりするポンコツ発電機の配線の被覆が剥がれ水に触れていたのです。我々は防水・防電の安全靴ですから感じませんが、うら若き日本女性に襲い掛かったのです。早速、寺島さんがレターに書いて「人命に関する重大事項なので是正して欲しい」と申し入れましたが、プライドの高い海運省から「溶接に関し日本人から学ぶことはありません」と頓珍漢な返答が来ました。作業員たちには水に入らないように、との注意で終わりました。

「流量測定機器」のトラックからの落下事故も発生しました。この機器はローディングアームの手前に付ける目玉商品の一つでした。1/100の精度でしたが当時は世界一の機器でした。高さ3メートル、縦横1.5メートルの大きなもので上部において配管と繋がりますので重心が上方にある頭でっかちな商品です。大きな箱に入っていたので運転手が固縛しないで大丈夫だろうと、勝手に判断したようです。港に

入る前のカーブで荷台から落下し、立派な箱は完全に壊れ機器は傷つきました。

立派な箱についてですが、この梱包された箱は開梱後に木材、ビニール、緩衝材など多くの廃棄物が出てきます。最初の頃はこれらをどのように処分すればいいか頭を悩ませましたが、そのうちにすべて解決しました。貨物や荷物は日本での規格に定められた輸出梱包仕様で梱包されます。木材は害虫駆除などを完璧に行った普通の家が建つような立派な木材が使用されていました。中の緩衝材、段ボール、ビニールも一番上質のものが使用されていました。魚心あれば水心で開梱作業がある日は、現場で行列ができるようになりました。人々は開梱した廃材などを欲しがっていたのです。皆、木材やビニールなどを手に持てるだけ持って、車に乗せて大騒ぎではしゃいでいるのです。寺島さんに彼らは何に使うんですか？ と聞きますと、厳しい冬を越すために家や家畜小屋の補修に、ビニールは窓を覆って隙間風が入らなくするためだそうです。

こんなこともありました。相変わらず作業員、クレーンオペレーターの遅刻・欠勤が頻繁に起こります。訳を聞くと決まって、「バスが遅れた、タイヤがパンクした」と毎回毎回同じ言い訳です。海運省に文句を言っても「ヤポニマイ、仕方がない」と素っ気ない返事しか戻ってきません。中には日本人のようなまじめ？ な人もいます。その人たちには明日も現場に来てもらおうと、日本人作業員も我々も気を使っていました。寺島さんからは、「100円ライターとかストッキング、カレンダーなどで機嫌は取らない方がいいですよ」と忠告されました。理由は日本人と仲良くなると、こちらの作業所に割り当てられなくなり、来たくても来なくなりますよ、とのことでした。ある時ソ連人と仲良くなり、コルホーズで取れた小指ほどの小さなイチゴを籠いっぱいにもらったことがありました。お礼にとその人を宿舍のハム焼きパーティーに呼んだことがありましたが、次の日から彼は来なくなりました。ソ連では外人と仲良くなるとは問題になるようです。いつもあからさまに監視されている状況で嫌になります。こんな日々がずっと続くのです。

(続く)